

米欧亜回覧

第81号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

二十周年記念事業のプレ企画・・・ 講演会・新年会・セミナーと多様に催行

記念事業プロジェクトは、歴史部会(A)、近代史研究会(B)、グローバルジャパン研究会(C)の担当で、プレセミナーの議論を経てそれぞれ設定されたテーマによる本セミナーが企画され、十二月に向けて着々と進行している。

(詳細は四頁)

秋の全体例会では、保阪正康氏の講演

二〇一五秋の全体例会は、十一月十五日(日)、一ツ橋の総合センターで開催された。担当は近代史研究会で、本プロジェ



2015年11月15日全体例会

クトの特別顧問である保阪正康氏の「現代的課題を大正時代から考える」というテーマで講演があった。明治と昭和の間に挟まって僅か十五年しかなかった大正時代はこれまであまり評価されずに来たが、保阪氏はこの期間をとっても重要な時代だとして、現代的課題を考える上でも大いに見直すべきだと、「大正時代を甦らせよう」と強調された。質疑応答も盛んで二次会も含めて大変中身の濃い時間となった。

(詳細は二・三頁)

新年会は映像と音楽で・・・

平和と幸福を祈る」をテーマに大盛会！

「ニューイヤーズパーティー」と銘うった新年会は、一月九日(土)有楽町の日本外国特派員協会で行われ、担当幹事の近藤義彦氏、岩崎洋三氏、植木園子氏らを中心に多くの会員の協力によって、九十名近い出席者が参集して華やかに賑々しく行われた。それは、「平和と幸



2016年新年会 (1月9日・日本外国特派員協会)

福」をテーマとする薄井大還氏の映像と卓話、それにまつわる音楽ありスピーチありの内容で、大いに盛り上がり記念事業の魁となるにふさわしい会となった。

(詳細は三頁)

四月総会例会は、五百旗頭真氏の講演

四月十七日(日)は、年次総会の後、グローバルジャパン研究会の担当で本プロジェクトの特別顧問でもある県立熊本大学の理事長である五百旗頭真先生の講演「世界の中の日本の未来」がある。これは、二月からスタートしている第三テーマの本セミナーの一環をなすものであり、十二月のグラントシンポジウムを視野にいられた基調的な講演になることが期待される。多くの会員の積極的な参加を望みたい。

明治大正を終えた「近代史研究会」は、このところ戦後昭和に入った。吉田茂、石橋湛山、下村治とつづき、明治百五十年のパーस्पекティブがおぼろげながら観えてきた感じがする。そこで想起されるのが、久米邦武の「米欧回覧実記」における「四十年説」である。一八七〇年代、繁栄の頂点にあった大英帝国も歴史を辿れば四十年前には蒸気船も鉄道も電信もなかった。そこで岩倉使節団の面々は、「洋才」つまり西洋の技術やシステムを学び、摂取していけば「四十年もあれば追いつけるか」と直感したのだった。その後、日本をみれば、明治においても戦後においてもほぼ四十年で「強兵」と「富国」に追いついている。

明治150年における「春夏秋冬」 ～80年サイクル史観を問う

泉 三郎

み「春夏秋冬」にも対応する。二十年は一代を意味し「青春・朱夏・白秋・玄冬」と表現すればそのニュアンスも伝わってくる。インドの古代思想にも四期に分ける考えがあつて「学生・家住・林住・遊行」というらしい。日本近代を「人物の群像」を通してみていくと、結局「歴史は人間がつくるもの」との感触を深くする。それも一代ではなく二代・三代・四代かけてつくっていくものだということがある。そこには成功もあれば失敗もあり光と影が纏のように織りなしている。それは「栄枯盛衰」のリズムであり「四季の変化」を想わせる。それを歴史に適用すれば、「生物史観」、「バイオ史観」となるのであろうか。この史観からすると、現在の日本は「玄冬」、「老齡」、「遊行」の季節ということになる。が、冬には春の芽が、老いには孫の命が、遊からは知恵が生まれる。あと十年、平成の今は「春をまつ充冬」といえるのかも知れない。

第77回 全体例会

保阪正康氏講演
現代的課題を歴史から考える
〜大正時代を甦らせよう!〜

十一月十五日(日)、第十七回の全体例会が、一ツ橋の学術総合センター会議室で開催された。司会進行は近藤義彦事務局長。

第一部の会務報告は、まず、泉代表の挨拶があり、二十周年記念事業の現状報告がされた。続いて、部会報告が、小坂田(読む会)、岩崎(サトウ輪読会)、小野(歴史部会)、山田(近代史研究会)、畠山(GJ研究会)、中山(メディア委員会)の各幹事からあった。次いで、岩崎氏からTri-CafeLectureの総括、日比谷カレッジ、中浜万次郎の会との合同研究会、そして、植木氏から一月の新年会およびJ-careの計画が報告された。

休憩後に第二部の講演となった。近代史研究会の山田哲司幹事の司会によって、講師の保阪正康氏の近著などが紹介され、講演が始まった。途中休憩をはさんだ内容の濃い講演と質疑に、参加者全員が聞き入った。

全体例会終了後、多くの参加者が講師を交えた懇親会の会場に向かった。

【講演要旨】
落ちついた大正時代

大正天皇の在任期間は僅か十五年、この短さに何かの謎があり、近代史の中で必ず検証されなければいけない。大正十年十一月、病が優れないというところで政務を当時二十歳の皇太子(昭和天皇)に摂政官として譲り、実質は十年間。天皇制が二重構造になつている崩御までの五年間が何だったのかという研究がされていかない。この検証をせずして近代日本の明治・大正・昭和を通底するような考え方は引き出すことができない。

年譜を調べると落ち着いた時代で、歴史の変革点になるような大きな事件は見当たらず、軍の動きもほとんど見えてこない。昭和になるととたんに軍事が動き出し、第一次、第二次山東出兵や張作霖爆殺事件があり、共産党が政党として密かに作られ、政府の側が治安維持法で取り締まる。

動的になる昭和

昭和天皇摂政官の五年間のいつてみれば「静」が、年号



講師の保阪正康氏

が変わつただけで急に「動的」になる。軍事指導部の中には、暗黙の統一した意識があり、昭和の初年代、彼らは天皇を何とも思っていない。一方、青年将校は逆に天皇神聖説で、S.T.S. 結果としてはS.S.Sになる。

それとは別に満州事変が起きるが、明治二十二年生まれの石原莞爾は、天皇のためにやるなどとは少しも思っていない。石原はベルリンの駐在武官のときに西洋の軍事学を全て読み、それを翻訳して自分の軍事学をつくった。日本の軍人の中で自分の軍事学をつくったのは石原莞爾だけである。昭和初年代には軍事の色々な立場、考えがあるが、共通して言えるのは天皇が神であるわけではないと考えていたということ。こういう不謹慎さのつけが十年代に全部まわってくる。

先帝否定の方程式

大正天皇は文人肌、漢詩・和歌の才のある文化の人、当

然ながら軍事が嫌い、明治天皇とあまりに違う。このような性格は、この時代に投影していると思う。孝明、明治、大正、昭和、平成とみてくると、天皇を論ずるときに方程式があることに気付く。それは、先帝の否定、意図的ではなく先帝と違った体制を目指すということ。君主制下の政治体制は、国体があつて政体がある、天皇自身の意思であると同時にこの国の基本的な骨格であつた。今の憲法では国体があつて政体があるのでなく並立化している。昭和天皇は国体があつて政体があると最後まで考えていたと思

うが、それを今の天皇が否定した、だから、戦後民主主義を守るというのは革命的な変化であり、大正天皇が基本的には目指していたものと通底している。

ドイツについて

大正時代の十年間は、軍事、政治、経済、文化などが分裂しているのではなく重なり合う時代となつていく。

日本は第一次世界大戦では連合国側につくが第二次世界大戦ではドイツ側につく。この捻じれの原点を考えるには大正時代を考えるべきである。第一次世界大戦を戦いながら軍人の殆どがドイツにシンパシーを持っていた。大正時代はドイツと戦ったが、

ヨーロッパでドイツ兵と撃ち合う経験はなく、敵というイメージはない。第一次大戦が終わり、大正七年から陸軍のエリートたちはドイツに留学して、ドイツの陸軍が何故負けたかを研究し分析し、ドイツの戦略の間違いではないという知識を持って帰ってくる。

自由な時代、多様な思想

第一次大戦後は世界的に反省の時期を迎え、政治的には国際協調路線、軍事的には軍縮、日本も吉野作造の民本主義、それに賛同する学者たちが黎明会をつくる。一方で、北一輝、大川周明の国家主義運動が起きるが、彼らは天皇絶対主義と必ずしもいつていない。大アジア主義、国家社会主義の色合い。それらと一線を画す形で共産主義運動が起り、色々な思想の見本市のような状態ができてくる。思想の勃興期、思想そのものが国民の中に伝承していくプロセスをみると大正時代は自由だったということが分かる。経済的にも繊維、海運などが潤い、四大財閥も残る。大学、高等専門学校を卒業した人を企業が入社試験でとるようになり、東京周辺に、高級生活者の住宅地ができて、新しい階層、中間階層が育っていく。大正時代の中に潜んでいる私たちの国の



近藤事務局長の
軽妙な司会でス
ムースに楽しく
進行



2016年新年パーティ
開宴前のストリングス演奏

持っている健全さがある。
昭和十年代は異質空間
大正時代をみるのに軍部主
導体制の枠の中でみるとい
うことから一回離れて、洗い直
すことで私たちの昭和を見る
目が少し変わってくるのでは
ないか。昭和十年代は日本の
異質の空間だと思う、日本人
が侵略性や残酷性の国民性で
あるとは思わない、私たちの
国のバランスのとれた発想、
文化、伝統というものを継承
して新しいものをつくってい
く素地が充分あったのに、軍
部指導体制の総括の中で大正
時代が軽率に忘れられてき
た。もう一回、大正時代を見
直し、大正時代を甦らせよ
う。そこに詰まっているもの
の中に我々の原点があるので
はないか。(文責・中山進)



写真家・薄井大還氏の卓話「平和と幸福を祈る人々」

二〇一六年の新年会は一月
九日に開催された。皇居を望
む日本外国特派員協会は恒例
の会場。泉代表の挨拶に続
き、皇室とも縁の深い写真家
薄井大還氏の卓話と写真上映
は「平和と幸福を祈る人々」
で、ダライ・ラマ、マザー・
テレサほかに及んだ。
サロン・コンサートは岩崎
洋三氏とピアノの植木園子さ
んがプロデュース。プロの伊
藤悠貴さん(メゾソプラノ)、
伊達伸子さん(メゾソプラノ)、
更にストリングスの演奏も楽
しんだ。会場には大久保利泰
氏、英訳版実記を出版した斉

第78回
新年例会

二〇一六年・新年パーティ開催
テーマは、平和と幸福―地球を元気にする人々



当会でお馴染みとなったチェロ演奏の伊
藤悠貴さん(右)とメゾソプラノ独唱の
伊達伸子さん(左)

藤純生氏(日本文献出版・社
主)、北代淳二氏(中浜万次
郎の会)ほか会員とゲスト、
音楽家を含む多彩な参加者は
計八十余名。
i-cafeのシンガーズと会場が
一体となった合唱でも盛り上



開宴の挨拶をする泉三郎代表(右)
大久保利泰氏による乾杯(左)



中浜万次郎の会
北代淳二氏



日本文献出版
斉藤純生氏

がった。ゆうきよしなり氏
(カード)、古俣美樹さん
(プログラム)のデザインも
好評。お蔭様で新年会も毎年
盛会。皆様に深謝します。
(近藤 義彦)



演者、i-cafeシンガーズ、スタッフによる合唱



20周年記念事業実
行委員長の塚本弘
幹事が開宴の挨拶



最後は、納屋さんの歌声に合わせて全
員で唱歌を合唱



コンサートのプロ
デュースは岩崎洋三幹
事(右)と植木園子幹
事(左)はピアノでも
活躍



二十周年記念事業 各部会担当で着々進行中

記念事業プロジェクトはご承知のように、歴史部会、近代史研究会、グローバルジャパン研究会の担当でそれぞれテーマに基づきセミナー形式の勉強会が順次進行している。

セミナーAは歴史部会の担当で、第一テーマの「岩倉使節団の群像」明治国家に何をもたらしたか」のシリーズを行っており、畠山義成、田中不二麿、新島襄の発表が行われ、三月七日には木戸孝允、二十二日には女子留学生の発表がある。

セミナーBは近代史研究会の担当で、第二テーマの「日本近代の成功と失敗」一五〇年の歴史を群像で探る」が行われ、昨春来、明治・大正と約二十名を終え、本年に入ってから戦後昭和に移って、吉田茂、石橋湛山、下村治、高崎達之助、黒沢明、大平正芳、松下幸之助、小林秀雄と続く。

セミナーCはグローバルジャパン研究会の担当で、第三テーマ「地球時代の新しい日本像を描く」シリーズを二月より外部講師を招いての本セミナー形式でスタートさせた。その第一回は東洋大学の理事長である福川伸次氏(元通産省次官)の講演、第二回

は三月十七日、東京大学名誉教授の和田昭允氏(生物物理学者)の講演が続く。

なお、付帯事業としてメディア委員会検討されていた「バーチャルミュージアム」構想については、現在のホームページを活用してその枠内で類似の内容のものを作成することになった。担当は、吉原重和氏、政井寛氏、村井知恵氏、多田直彦氏らで、コンテンツについては泉三郎氏の著作や資料並びに小野博正氏の労作「岩倉使節団と関連する群像列伝」などを素材としながら新しいものも探索補足し今後具体案を作成していくことになった。

近代史研究会の活動報告

近代史研究会は、当初、会の設立二十周年記念事業のうちBグループとしてスタートし、年初からは「近代史研究会」として活動を続けていく。幕末以降百五十年の歴史を辿り、日本の近現代史の光と影を、その時代を代表する人物から何名かを選び、その事績から、その人物が生きた時代がいかなる時代であったか、後世にどのような影響を及ぼしたかを検証し、現在につながる諸問題の源流を探ることを試みている。報告者は会のキーメンバー八名が交代で当たり、昨年夏までに明治編、年末に大正・昭和前期編

を終了し(各期延べ十名により十テーマ)、一月以降昭和後期編に入っている。報告会は、平均すれば十名強の参加者をえて、活発な議論が行われている。会員は誰でも参加自由、一層の出席を願う。

さて、現在進行中の昭和後期編の一月以降の報告は、「吉田茂」(報告者 泉三郎氏)、「言論人としての石橋湛山と政治家としての石橋湛山を結ぶもの」(小松優香氏)、「下村治と高度経済成長」(吹田尚一氏)、「高崎達之助と企業の社会的責任」(井出亜夫氏)、「黒澤明」二十世紀を代表する映像作家」(半澤健市氏)までをすでに終了し、引き続き「大平正芳とその政治構想」(山田哲司氏、二月二十九日)、「松下幸之助と戦後の資本主義」(森本淳之氏、三月四日)、「小林秀雄」近代の逆説」(持田鋼一郎氏、三月十日)、「昭和編総括と今後の運営について」本セミナーの具体的展開について(近代史研究会幹事を中心とする検討会、三月十六日)を開催する予定となっている。

四月以降の活動(本セミナー)の具体的内容については、上述の「昭和編総括」会議において検討するが、概ねの方向としては、①テーマを明治、大正、昭和の各時代別

に、政治、思想・文化、経済・社会の三分野に分けて選定する。②それぞれの時代区分におけるPoint of No Returnとなる事象又は時代を象徴する事項を挙げて、これまで行った人物論を柱にした報告を再整理する。③その結果をもとに、テーマを各時代二〜三項目に絞り込む。④四月以降、以上のテーマをもとに、外部からの講師を招き会員側の発表も交えて、本セミナーを実施する。と考えている。細部については、近日中に当研究会の顧問の保坂正康先生にも相談する予定になっている。

(山田 哲司)

映像と音楽でたどる岩倉使節団
アメリカ編
「中浜万次郎の会」と合同研究会

創業五年の中浜万次郎の会様から「我々の例会で「i-Cafe」をやって欲しい」との誘いを受け江東区教育センターでのコラボが実現した。

第一部でDVDアメリカ編の上映と泉三郎代表のお話、第二部のミニ・コンサートではソプラノ武藤弘子さんと「Cafe Singers」(畠山、岩崎、西川、吉原)でアメリカの民謡を植木園子さんのピアノ伴奏で披露した。その後先方のご案内で「深



中浜万次郎の会の皆さまと一緒に



伊達伸子さん(右)と吉原氏(中)、岩崎氏(左)

川ミニ散策」。深川不動尊ではインド源流の真言密教秘法「護摩祈祷」の貴重な体験をした。打ち上げには先方三十人、当方十人の殆どが出席して盛り上がり、さらなる交流を約し、「他流試合」の効用を実感した。
I-Cafe @ シェア奥沢
岩倉使節団の米欧回覧(フランス編)
第一部はDVD第六章「麗都パリとフランスの魅力」上映後、芳野健二氏が「映画ポスターとスケッチでフランスの魅力を存分に」語った。第

二部ミニ・コンサートではメゾ・ソプラノの伊達伸子さんが、「サムソンとデリラ」のアムールと「カルメン」のハバネラなどを歌って下ったが、大劇場で歌いなれたオペラ歌手のパワーに全員圧倒された。植木さんのピアノ伴奏で「i-Cafe Singers」メンバー吉原、岩崎の両氏は伊達さんと一緒に「オ・シャンゼリゼ」を歌った。

今回の「i-caffe @ シェア奥沢」は、三月二十七日「ロシア編」を予定している。

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方々の自己紹介です。

與賀田 正俊

泉先生の米欧亜使節団の講義を受け、先の大東亜戦争へと我が国が走った遠因としての明治維新との関係に関心があつた自分として、何か更に勉強する機会があるのでは？と思ひ入会しました。又、私の初めての米国大陸への上陸がサンフランシスコであつただけに使節団の旅行記は私にとって大変感銘を受けました。今は唯皆さんの素晴らしき研究成果に驚くばかりです。

遠藤 藍子

本会の近藤事務局長同様、岩倉使節団の一員近藤鎮三の曾孫にあたります。父は生前

母親の実家(近藤家)の話はしても鎮三については何も語らず、知らぬままに過ごしていましたが、昨秋泉理事長のナビゲートによる使節団の概説講座に参加し、使節団の果たした役割への興味が俄然喚起されました。社会人学生として幕末関連事項を最近卒論に纏めたことも関係しているかもしれない。普段は大学で日本語教育関係講座を担当しています。

ウテ洋子クネッパ

私の歴史好きを知った友人からの誘いの縁に恵まれ、入会させて頂きました。私は今、ドイツ人の父が一九七五年に購入し、芸術家的センスを活かしてリフォームした、江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の庄屋敷で、長屋門のギャラリーの館長としております。江戸末期から明治の長崎に住んでみたかったなとか妄想しております。古今東西の異文化交流など、とても興味があります。宜しくお願ひいたします。

ゆうきよしなり

私はイラストを描きます。学生時代に物理学を学んでいたこともあり、科学や教育に関する絵を描くことに多く携って参りました。岩倉使節団の科学・技術の分野への関わりに特に興味を持っていきます。また、どんな分野を入り

口としても、その先にさらに豊かな森が広がっているような魅力を感じています。岩倉使節団の米欧亜回覧から多くのことを学び、現代の状況に對峙し未来を描くために活かしていきたいと思つていきます。

筒井 潔

塚本弘様に声を掛けて頂き入会しました。十数年前までは応用 物理の研究者として、それが、日本近代政治史など勉強しないまま、企業経営や公共政策分野でのコンサルタントとなりました。系統としては、かつて汎アジア主義を唱えたコンサルタントの流れを汲んでいます。「日本的」という概念が揺れ、世界の中の日本の存在感が低下している今、岩倉使節団の時代に学ぶことは多いと思つていきます。皆様からご指導を頂ければ幸いです。

幅 泰治

一九三七年、名古屋市生まれ。大学より東京に出、メーカー勤務の上、卒業後、美しきものを観、慰めの音楽を聴き、温故知新に分け入り、旅に俳諧しています。日本と西洋との往還を焦点とし、幕末の歴史を追っています。

現住の江東区深川に昔、土佐藩下屋敷があり、万次郎が住まったことから、「中浜万

次郎の会」事務局を推進し、「米欧亜回覧の会」との共通事項探索探でもお世話なっております。よろしくお願ひ致します。



実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@icom.home.ne.jp

■第百九十八回

十一月十二日開催、参加者四名。第98巻「支那海航程の記」八月十八日新嘉坡に着いたところから始まる。マレー半島、スマトラ、マラッカ海峡の記述から、ベトナム・サイゴンの寄港を経て、二十七日香港に着くまでの支那海航行の記録である。偶々、今回の報告者が若き頃に、船員として往復したことのある思い出深い海域であり、且つ、ベトナムは仏印三国の駐在として五年間を過したこともあって、マレーシア、シンガポールに加え、ベトナム、ラオス、カンボジアの歴史、風土や現状について実体験を含めて解説した。

ためか仏印三国全体を、ベトナムと取り違えて解説している。従って非常に分かりづらいう上に誤謬が多い。欧米各国の記述では、非常に正確を期していた久米としては、誠に珍しいことである。久米にしても、東南アジアの瑣末地域についての軽視が感じられないくもない。現在の世界貿易量を一般雑貨(コンテナ)ペーソスでみると、何と世界貿易量の過半数を東南アジアから中国までの支那海域が占める。トップは上海、一位が新嘉坡、三位が深剗、四位香港、五位釜山、六位寧波、七位青島、八位広州、九位ドバイ、十位天津、十一位ロッテルダム(やつと欧州)、十二位大連、十三位クアランプール(マレーシア)、アメリカはロスアンジェルスがやつと十七位、日本に到っては、東京が二十八位、横浜四十八位、名古屋五十一位と情けない状態である。現在は世界の生産拠点、中国、東南アジアにシフトしていること一目瞭然だ。一例が、使節団が寄港した当時のシンガポールは、英国植民地として、小さな港だったが、現在は、外国為替市場(三位)、金融センター(四位)、九年連続して最もビジネス展開に適した国として繁栄を極めていく。

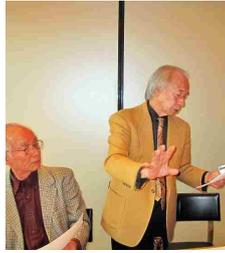
(小野 博正)

■第百九十九回・忘年会と実記
を読む会の地球二周終了をお
祝いする会

百九十九回目は、「第百章
香港及び上海の記」の泉代表
の報告、忘年会と地球二周終
了を祝って、十二月十日に新
宿の「さがみ」で行われた。
出席者は十四名で、日本料理
に舌鼓を打ちながら、生ビー
ル、ワイン、日本酒、焼酎を
飲みながら、芳野さんの飛び
入りのプレゼンにも耳を傾
け、賑やかに執り行われた。

明治六年(一八七三年)九
月十三日に岩倉使節団は横浜
に帰ってきた。来年(二〇一
六年)から「実記を読む会」
は第一章から読み始め、地球
三周目に入る予定である。

(小坂田 國雄)



泉代表の「第100章 香港及び上海の記」(右)
地球2周を祝って「新宿さがみ」で忘年会(左)

■第二百回

一月十四日開催。「例言」
第一卷「太平洋の旅」第二卷
「アメリカ合衆国総説」

岩倉使節団は、明治四年十
一月十二日、西暦でいうと一
八七一年十一月二十三日の
朝、横浜港をアメリカの蒸気
外輪船アメリカ号で出帆し
た。岩倉具視を主席の特命全
權大使として、副使としては
木戸孝允、大久保利通、伊藤
博文、山口尚芳、さらにその
下に理事官、書記官等、総勢
四十八名の大使節団であつ
た。この使節団には、またさ
らに華族や士族の留学生五十
九名が同行していた。この留
学生たちのなかにはやがて大
山巖の妻となる山川捨松や、
あるいは津田塾をはじめること
となる満七歳の少女津田梅
子などの女子留学生五名もい
たし、また中江兆民、金子堅
太郎、團琢磨、牧野伸顕と
いった将来の日本の知的分
野、あるいは政治の分野で指
導者となる青年たちも多く含
まれていた。

の使命とする使節団であつた
のである。
岩倉一行は太平洋を渡って
アメリカへ行き、アメリカで
約八か月過ごしたあと、ヨー
ロッパに渡って、イギリスか
らフランス、オランダ、ドイ
ツ、そしてロシア、さらに北
欧諸国、そして南に下ってス
イス、イタリア、オーストリ
アと、ポルトガル・スペイン
をのぞくヨーロッパのすべて
の国をめぐる、明治六年
(西暦一八七三年)九月十三
日(陽暦)にこの同じ横浜に
帰ってくることになる。一年
十か月に近い長い忙しい旅で
あつた。

ラチャ山脈である。
*アメリカの人は一般に活気
に満ちており、機械の発明も
活発におこなわれている。

(小坂田 國雄)

■第二百一回

二月十一日開催。第三卷第
四卷

一行は明治四年一八七一年
十二月六日に二十数日の船旅
の末、ゴールデンゲートを通
過してサンフランシスコの港
に着く。(新暦ではすでに翌
年の一月十五日!)この街は
一八四八年の金鉱発見以来大
発展を遂げ、一八六〇年には
五万人、一八七一年には十五
万人に達しており、各所で大
歓迎の祝砲を受け、パー
ティー・工場見学に忙殺され
る。十二月九日に至っては、
昼間の見学のあと夜は観劇・
舞踏会に連れ出され、帰着は
深夜の二時。そして翌朝は八
時半に行動開始!よくまあ体
がもったものだと思心する。
久米は最初の訪問地につき、
グランドホテルの備品や学校
の様子など詳細に述べてい
る。そして早速「西洋は外交
を好み、有形の理学を勉むる
も、東洋は外交をはばかり、
無形の理学を篤くする」と得
意の東西文化比較論をぶって
いる。
さて、彼らの西部東部への
旅のスタートにあたり、私人
りに理解したアメリカの歴史

と現今の大統領選に見られる
北と中南部の大きな溝を分析
してみた。

一、アメリカの膨張

(一)段階的領土拡大を階段
にたとえて図解、(二)一八
三〇年以降百年を十年刻みに
移民の数を出身国別に色分
け。アイルランド↓ドイツ↓
東欧↓イタリア↓ロシア、そ
して中国、日本、それぞれ遅
れてきたものたちを踏み台に
して生きていくのに苦勞をし
たのであろう。(数々の映画
に現れる)
二、鉄道建設と会社へ払い下
げられた広大な面積の図(ほ
ぼ日本の面積)
三、広大な各州を州名の由来
(ネイティブの地名)や西部
劇の舞台、ローラや「怒りの
葡萄」の移動ルートを大きな
手作り地図で辿ってみた。
四、Wブッシュ対ケリー、オ
バマ対ロムニーなど大統領選
における民主・共和の色分け
の固定化の図。アメリカはど
うも北部と中南部の二つが現
代の北軍南軍のように意識対
立しているようだ。
五、一八四八年に北海道へ意
図的遭難をして「最初の英語
教師」となった「インデアン
青年マクドナルドの冒険」
を、我らがジョン万次郎と対
比してみた。二人の「日米単
語帳」は面白い!
六、最後に、十九世紀二十世

紀を五十年刻みに「戦争のアメリカ、平和(?)の日本」と題して考察してみた。アメリカの対外軍事行動は、十九世紀前半四十件、後半六十五件、二十世紀前半八十件、後半七十七件と驚くほど多いのに対し、日本は十九世紀前半までのパックス・トクガワナ(鎖国)の後、ペリーがやってきて十九世紀の後半から約百年、十五、二十の度重なる戦争を経て、今日「七十年の平和」を維持してきたことに改めて感動する。今後引き込まれ事故に注意が必要である。(芳野 健二)

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事 岩崎洋三
Tel 080-7959-4332
iwasakiyz1116@gmail.com



奉行、護衛付きの大名旅行であった。「鳥羽伏見の戦い」が勃発する半年前、政治的には激動の時代である。あえて陸路をとったこの旅は、日記には書かれていないが、東海道周辺の情報収集を目的としたものであったのだろう。日

■第十七回

十月二十一日 開催。

Overland from Osaka to Yedo
サトウ一行の東海道の旅は一八六七年五月中旬から二週間。激務の後の休暇旅行とはいえず、幕府方の外国

記には道中の宿場、各大名の対応、地理、風土、産物、慣習、民情等が克明に描かれており、英国の地理学の伝統に驚嘆を禁じえない。

掛川宿では攘夷派の刺客の襲撃に遭い、九死に一生を得た。また、浜松藩付近では京都に向かう幕府方伝習兵連隊を見て、薩長連合との戦いが近いことを察知しただろう。サトウは東海道について、

「石で舗装された松や杉の大道木が林立する立派な並木道で、ローマのアッピア街道を思い起こした」と賛美している。東海道はあらゆる点から見て日本国中で最も重要な道路であった。この東海道を旅したことは、サトウ一行にとって、文化、経済、諸藩の動向を探るうえで有意義な経験であったに違いない。(小泉 勝海)

■第十八回

十一月十八日開催。 XIX Social Intercourse with Officials-Visit to Niigata, Sado Gold Mines and Nanao

この章では、日本側、特に幕府役人との接触機会の増加に伴い学んだ日本式礼儀作法、及び日本海側開港のための現地調査の様子を記述している。英使節団と幕府役人達との接触機会増加の背景として、サトウは、幕府が同使節団と薩長の間の親交を妨げよ

うとしているとみている。サトウは、日本式礼儀作法殊に食事作法を、細部に亘り学んだことを記述している。

ハリス卿、サトウ、公使館書記の小野などは、七月末、軍艦「バジリスク号」で函館経由、新潟へ向かう。目的は日本海側に開港するための現地調査である。現地の奉行である白石下総守は、サトウと旧知の仲で会見も無事終え、避難用の良港もあると伝えられた佐渡へ渡り金山も見学したが、サトウは興味なく坑内には入らなかった。次に、新潟の代わりになりうる港があるという七尾(別名「所ノ口」)へ向かう。ここは加賀藩の領地で、同藩の役人達と会談した。

ハリス卿の命により、サトウは陸路大坂(大阪)へ向かうこととなり、卿自身は軍艦で長崎経由横浜へ向かった。サトウは、日本内地を見られる機会を得て大いに喜んだ旨記述している。(永島 脩一郎)

■第十九回

十二月十七日開催。 XX Nanao and Osaka Overland

第20章には視察旅行の後半部分の視察を終えた、サトウをはじめとする英国公使館一行は陸路、前田領金沢へと向かう。金沢では加賀藩大名(第

十三代(最後の)藩主、前田慶寧)との面会は果たせなかったものの、豪華な饗宴でもてなされ、七尾開港について重臣たちと密談する機会を得た。外国人との貿易は望むが、七尾を公然と開港することは欲していないとする加賀藩の意見に対し、サトウたちは、英国側は加賀藩の大名の希望に沿って行動すると答える。翌朝、重臣たちから七尾開港後に加賀藩は幕府に貿易額の一定割合を上納するのが最善の策であるという結論に至ったと聞き、サトウは変革を望む南西諸藩との政治的立場の違いを再認識した。

一行は大聖寺領を経て、越前藩に入る。越前藩では立派な食事と宿舎を提供されるが、一行を接遇する藩士の態度は冷淡で礼節を欠いていた。サトウはその理由について、藩主が幕府と濃い親戚関係にある越前藩の難しい立場から外国人に極端な警戒心を持つていたのであると解釈する。

彦根領草津では幕府の役人から石山寺詣でを勧められるが、外国人に帝の住まう京都近郊を通行させたくない幕府の意図を感じた一行は大津経由を主張する。結局、幕府側が妥協して宇治経由の大坂行きが認められ、一行は船で大坂に到着した。サトウは再会

したハリス卿から英国軍艦水兵2名が殺害されたと聞く。輪読後、出席者各位から加賀藩と越前藩の藩主、平山図書頭、板倉伊賀守などの登場人物について様々な話題が提供された。(榎原 知子)

■第二十回

一月十三日開催。 XXI Osaka and Tokushima

一八六七年陽暦八月五日、長崎港停泊中の英軍艦イカルス号の水夫二名が殺害される事件が起きた。最初土佐藩士に殺人の嫌疑がかかった。ハリス卿は激怒し、主席閣老老中板倉勝静との面会を要求。二人の長崎奉行の罷免等、強硬な要求を申し入れた。板倉はこれを受け入れたため、パークスも將軍謁見に応ずることにした。

八月二十六日、將軍慶喜はパークスを大阪城で引見。ミットフォードとサトウも同席した。その朝、サトウは西郷の訪問を受けた。会見の様子を知らせる、大久保一蔵あて西郷書簡の写しが紹介されている。最も注目すべきは、援助が必要とあらば、その用意はあるとのサトウの申し出に、日本の政治改革は自分達でやりとげるとの、強い意志表明である。その翌日サトウは西郷を訪問。日本は幕府に代わり、国

歴史部会報告

担当幹事 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp



年)までの六年間に、考えは大きく変化を遂げた。この間の考えの変遷が明治新政府構想に直結し明治日本のかたち

文久二年(一八六二年)大久保は島津久光に従って初めて上京して以来、慶応三年(一八六七

■大久保利通が考えたこの国のかたち
十月十九日開催。

民議会を設立すべきとの西郷案をサトウは狂気じみた考えとうけとめた。大阪と兵庫の貿易を、豪商の組合に委ねてはとの考えもイギリスの考えには合わない、サトウは考える。
イカルス号事件究明のため土佐行きに先立ち、途上にある阿波の招待をうけることになった。藩主阿波守鉢須賀父子に迎えられ、パークスもサトウも阿波でもてなしに満足した。その背景には、サトウの日本人語教師の一人、徳島藩士沼田寅三郎の存在がある。沼田はサトウの「英国策論」の訳者であり、彼を介して藩主からサトウへの働きかけがあったと推察される(斉藤 恵子)

「大阪遷都の建白書」、「朝廷改革」、大阪行幸、東京行幸、と天皇の権威と存在感を国民の中に打ち立て新政府の正当化と権威づけを同時に行った。明治天皇の国民の前に現す姿は大久保構想の実現であった。これは、その後明治の「立憲政体に関する意見書」により、将来の開明的立憲主義への展望へと進化し

作りの源になった。当初は、島津斉彬の唱えた公武合体による強力な中央集権政体の確立という斉彬の遺志の実現に注力した。しかし、朝廷については公卿の見識の浅さと保身主義に失望し、孝明天皇についても帳の中での言動に限界を感じた。盛りたてようとした一橋(徳川)慶喜は諸侯を裏切り幕府の権威維持に固執したため見限った。列強諸侯は慶喜に翻弄されながらも幕藩体制を壊すことに躊躇した。ここで、薩長による幕府打倒それも平和的手段から武力による打倒へと考えは固まっていた。

王制復古のクーデターに続く鳥羽伏見の戦いを経て明治新政府は樹立した。すぐさま大久保は国のかたちをどうすべきかの構想を打ち出しその実現に取りかかる。これは、年間の熟慮の積み重ねがあったからこそその迅速の決断と実行であった。

薩摩藩密航留学生、杉浦弘蔵(畠山義成)
十月二十八日開催
前半は吉原が「薩摩藩密航留学生」について紹介した後半は新会員のシカゴから来られた村井智恵さんが「杉浦弘蔵」についてパワーポイントを駆使して発表した。
[薩摩藩密航留学生]
NHKの連続テレビ小説「朝が来た」で一躍その名前

ていく。伊藤博文が産みだした明治憲法は大久保の将来構想と一致している。

一方で、現実目前の政策実行のため、政治家・行政官には公卿・諸侯を排し、身分・出身に捕われず能力と人物本位の大膽な採用と抜擢を行った。これを迅速に有無をいわず実施し得たのは大久保あつてのことであつた。しかし、下級武士主体の官僚を天皇朝臣として権威付けた結果、「官尊民卑」の奢りも招き、後世に続く官高民低の流れを生んだことも間違いのない。大久保は「殖産興業」において官の干渉を戒め民の力に期待していたのだが。

吉原重俊は変名で大原令之助と名乗り、ボストン近郊に留学していた新島襄と交流があつた。ワシントンで使節団に参加した杉浦弘蔵、新島襄、大原令之助そして森有礼は留学生時代から旧知であつたと見える。多くの薩摩藩留学生が岩倉使節団を現地ですपोर्टしたのであつた。
(吉原 重和)

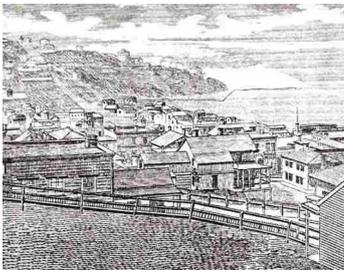
五代は留学生派遣などを提案する「上申書」を藩庁に提出し、一八六五年にグラバー商会所有の蒸気船オースタライエン号に乗船し串木野羽島浦から十九名の密航留学生の一員として英国へと向かった。そして翌一八六六年に更に五名の薩摩藩留学生が長崎を出港し米国へと向かった。彼ら薩摩スチューデントの中には寺島宗則、森有礼、杉浦弘蔵、鮫島尚信、吉田清成、吉原重俊、など岩倉使節団に関わりがあつた多くの留学生達が居た。

が知られるように成つた薩摩藩士の五代友厚は長崎海軍伝習所で航海術を学び一八六二年に幕府第一次上海使節団に高杉晋作と共に加わって上海に渡り上海事情の調査を行った。一八六三年の薩英戦争の後に長崎のグラバーとも親しく成り、武器の調達や留学生の派遣を英国に依頼する事となった。

一八七一年秋、欧州経由での帰国を命じられ渡英したが同年末には岩倉使節への合流を命じられて吉原重俊と共に再度米国に戻る。米国滞在中、久米、木戸と懇意になり、以後、書記官として岩倉大使に随行、久米と共に各地取材した。

「杉浦弘蔵(畠山義成)」
変名杉浦弘蔵こと薩摩藩士畠山義成は一所持数根家(土岐家)に生まれ、一所持格畠山家を継ぎ、将来の家老候補として一八六五年密航留学生となる。英国[5]での二年の留学を経た一八六七年夏、主に資金難からトーマス・レイク・ハリス率いる教団に参加のため渡米。翌年五月に教団を離脱、ミズモンスンにいた薩摩藩米留學生グループから紹介されたオランダ改革派教会外国伝道局総主事「ミズフェリス」を通じて、ミズニューブランズウィックのラトガース大学への転学を果たす。当時既に留学中だった日本人留学生らと親交を深め、後続留学生たちの世話役を務めた。

帰国後は文部省で開成学校(現東大)校長、博物館、書籍館、植物園等の責任者を務め、ラトガース大時代の恩師で後に文部省学監となったデビッド・モルレーと共に、主に高等教育のシステム確立に



『実記』銅版画・旅の始まり
ゴールデンゲートとブラック
ポイントの風景(第3章)

尽力したが、一八七六年十月、出張先のフライデルフイア万博から戻る船上で、結核により三十六年の生涯を終えた。没時、文部少丞中督学従五位。

(村井智恵)

■明治の文部行政と田中不二磨

十一月十六日開催、参加者十五名。

田中不二磨(一八四五〜一九〇九年)は尾張藩出身、維新前は藩主徳川慶勝の下、勤王の志士として岩倉具視の京都小御所での王政復古奏上の会議には大久保利通等と共に第三の間に控えるなど明治維新に尽力した。

新政府発足後は文部官僚に登用される。明治四年岩倉使節団の文部省理事官として米欧教育視察のため派遣される。明治六年帰国後『理事功程』を刊行。内容は米、英、仏、独、蘭、スイス、デンマーク、ベルギー、ロシアなど九か国の教育制度について

各国の教育行政当局及び教育関係者から説明を受け制度の概要、関係諸法規、諸統計を詳細に紹介した。『理事功程』は日本の教育制度形成の参考とされたばかりでなく、当時の米欧教育の概況を今日知る上でも貴重な資料である。日本の近代教育制度は明治五年「学制」を嚆矢とする。田中は米欧視察から帰国後、机上案だった学制の実施に腐心し苦闘する。折しも政府は台湾出兵、土族反乱、農民一揆、西南戦争等内外の波乱のほか地租軽減もあり、財政は逼迫する中軍費は歳出の約二割を充当するのに対し小学校補助金は削減し続け

る。いきおい田中は初等教育を地方と民間に依存せざるを得ない。田中自身も州と民間の自律主義を基調とするアメリカの教育制度を評価し、文部省の教育顧問米人モルレーの勧告も受け入れアメリカの風を積極的に呼び込む。「学制」を日本の実情に合わせた教育令原案を起草し、伊藤博文、元老院の修正を経て「教育令」(明治十二年)が制定される。しかし田中は翌年、司法卿任職のかたちで文部省を更迭される。「教育令」の地方主体及び自律主義は修正され「改正教育令」(明治十三年)にとって代えられる。そ

の後森有礼文部大臣の各「学校令」(明治十九年)によって国家主義の教育制度が確立されて行く。田中は「学制」実施に注力し教育制度を基礎づけ、現代に連なる教育の基本レールを敷いたといえよう。

田中のその他業績には学士会院創設、国語(日本語)による大学授業実現、女子教育の拡張推進、音楽教育定着化促進、体育教育推進、幼稚園教育制度化、図書館・博物館提唱、文部省年報刊行、教育雑誌継続刊行等がある。

(大森 東亜)

■岩倉使節団と新島襄

十二月十四日開催。

まず、発表テーマは、当会の設立二十周年記念シンポジウムのテーマが「岩倉使節団の世界史的意義と地球時代における日本の未来像―明治創業世代の「志」を体して―」であり、サブテーマが「岩倉使節団の群像は日本の近代化に何をもたらしたか」、岩倉使節団の群像―その「光と影」から学ぶ―であるので、それに繋がるように考えた。

前提として、「岩倉使節団の群像」は田中不二磨と新島七五三太の二人に絞り、「日本の近代化」は「日本の教育制度誕生への道筋を付けたこ

と」とした。その道筋とは、田中不二磨は「理事功程」作成刊行し、教育令の交付に結びつけたこと。新島襄は「理事功程」草稿完成。大学の構想確定。同志社英学校の開校、そして「同志社大学設立の旨意」の発表に結びつけたこととした。発表の目的は、「理事功程」の作成過程を新島研究資料で明らかにすることである。まず、「理事功程」を理解するために、岩倉使節団の報告書、「理事功程」の種類、「理事功程」作成指示、「文部省理事功程」の位置づけから説明した。次に、「新島研究資料」の内容を新島が遺したもの、関係図書、参考図書、先行論文から紹介。ここで、田中不二磨と

の教育視察に出かける前後の理解のために、「新島襄の足跡を巡るポストンツァー」の報告用DVDを上映した。本論は「森有礼との出会い」を新島研究資料で探るところから始め、二人が欧米視察した日々の行動を逐次、探る。この後「理事功程」が作成された過程で注目すべき点は何か?について参加者からご意見拝聴。

〈光〉としては、二人が成功し、具現化したもの。即ち、「理事功程」から教育令の交付。大学の構想確定から同志社英学校開校、「同志社大学

設立の旨意」の発表である。う。〈陰〉については、二人が掲げていた理想が実現しなかったもの、と言えよう。参加者は十九名。映像もあり、楽しんでいただけたのではないかと想像している。

(多田 直彦)

■「岩倉使節団人物列伝を書き終えて」と(試論)―宗教から見た明治維新― | 国学・漢学・洋学/神道・仏教・基督教・儒学の対立と攻防から考える

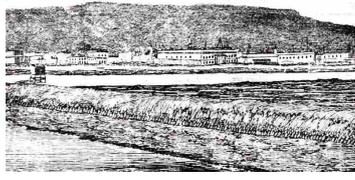
一月受八日開催、参加者四名。

前者は、岩倉使節団人物列伝(百六十五人―当会HPに掲載)を完成した。人物デッサンであるが、一人ひとりの銘碑墓(レクイエム)のつもりで人物の生涯を掘り起こした。個人列伝を書きながら、歴史は個人の事績もさることながら人物群像(塊)が何を成したかの視点も重要だと改めて感じた。これからは、テーマ別(明治六年の政変、明治十年の政変、不平等条約改定交渉、憲法・民法の制定などの)の研究も必要。明治維新の功労を叙勲した華族令(明治十七年)や賞典禄、更に元老の役割、薩長閥の成立、使節団参加の幕臣のその後の後退なども追ってみた。

後者『試論・宗教から見た明治維新』は、幕末の尊皇攘夷運動が、平田派国学者(神

道)と天皇が結びついて一つの改革エネルギーとなったものの、明治維新になると、天皇親政を狙った神道派が明治六年には早くも挫折していく経緯を、神道・仏教・基督教や儒教(漢学)・国学・洋学の対立・攻防の中に検証してみ

た。教育面では、神道を一旦最上に置いたが、儒学と洋学の反発が強くと揉めた。宗教面でも、神祇官が太政官の上に置かれたものの、二年足らずで、太政官の下に就いた。信教の自由を標榜する基督教や復権を図る仏教の勢力に敗けて、神道は結局、非宗教に祭り上げられ無力化してゆく。然し最後に国家神道として残り、天皇の神格化に繋がってしまった。その暗闘の過程を追った。一時は、神道・仏教・儒教の共同で国民を教化する教部省が設置され、宣教使や大教院が置かれたものの、所詮宗教の共同教化は成り立ち得ず、これも五



『実記』銅版画・帰路へスエズ運河の入口 (第95章)

年足らずで廃止に追い込まれた。廃仏稀釈の実態と推移を検証。また諸外国の要請で基督教が黙認され、日本人洗礼者が次第に増えていく過程も、幕末の浦上四番崩れの処理の推移を辿りつつ振り返

(小野 博正)

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 島山 朔男

hatakeyama@joy.hi-ho.ne.jp



■世界平和を指す 和の精神で世界のモデル国を目指す
十月十七日開

催。本間に世界平和を指すのであれば、ただ、理想を語るのではなく、具体的に行動に結びつくことが大事。

例えば、日本は、シリアの問題について、本間に具体的な解決策を考えているといえるのか。難民問題についても、ある程度実践していかないと世界から評価されない(緒方貞子)。五百旗頭真「国際社会と日本の安全保障」(月刊誌潮十一月号)では、「侵略戦争はしない」というのは正しい。しかし、いかなる戦争もしないというの、半分正しく、半分正しくない。戦争には、他国によって起こされる場合があり、その場合、私は戦争をしませんでは、答えにならない。(二)自助努力(二)日米

同盟(三)友好協力関係が重要。との主張。今回の安保法制については、現実に中国の海洋進出や北朝鮮の核開発を考えると、必要な措置という議論が多かった。日中、日韓関係は、最重要外交課題として、独仏の和解のような関係を構築すべき。このためには、五十年ぐらいの長いスペインでの発想で、取り組むべきなどの議論があった。(塚本 弘)

■万民が幸福に生きることができるとは何か
十一月二十九日開催。

一・今、何故、幸福論か。幸福とはそもそも何か。

*幸福は感じるもの *科学的アプローチと感覚的アプローチ:幸福指数のいろいろ

二・幸福の要件とは何か

*要件はたったの五つ?その組み合わせではないか。仕事、家庭仲間、お金、健康、趣味 *プラスαはポジティブシンキング! *幸福とは「よく生きる」こと、wellbeing 人類共通の幸福感

三・幸福を妨げるものとは何か

*お金がないこと(貧困、著しい格差、富の偏在) *仕事がないこと(機械が仕事を奪う、することがない、役にたつことがない) *身体が不自由なこと(病 気、事故、体調不良) *人間関係がうまく

いかないこと(いじめ、ハラスメント、妬み恨み、劣等感) *余計な心配をすること(グレイメがね、ネガティブシンキング)

四・幸福に暮らせる社会的条件とは何か?

*平和・治安 *雇傭、仕事

*適度の医療 *憩いの場、家庭、職場、コミュニティ *健全な思想

五・どうすればよいか、その処方箋は?

・富の再分配・仕事の再分配・過剰教育の削減・過剰医療の削減・自然流(ありのままに)、明るく前向きに、樂觀主義)

そしておわりに、目指すべき「地球時代の新しい日本像」は「天地人和楽の日本列島」Harmony within Cosmos, Earth & Human Beingsではないかとの提案を行った。

■日本を元気にする・地方創生
十二月十二日開催。
〔市民参加で地域を変える・日本が変わる〕

日本には多くの深刻な課題が山積しており、国民全員参加型で課題解決に向けて取り組まなければならない厳しい状況にある。将来的には、日本は課題解決先進国として世界のモデルとなる国を目指す

べきである。自らが地方自治を変える市民運動に参加、関与した経験から、様々な面で行政改革の必要性を痛感している。市民が地域の行政をよく見て、考え、課題解決に参加関与することが地域活性化のキーである。日本を元気にするため、国は「ふるさと創生戦略」や「地方分権改革」に懸命に取り組んでいる。地域創生の成功へ向けては、そこに住む市民の知恵、力、視点等を十分に活用すること、市民と行政との協働が不可欠である。

全国約千七百の地方自治体の課題解決に、市民の積極的な参画があれば、地域が変わり、日本全体が元気になるだろう。
〔東日本大震災に被災した気仙沼市が目指す地方創生戦略〕

日本経済の雇用の八割、経済規模の七割を占めるローカル経済が活性化しなければ地方創生など有り得ないと、二〇一四年十一月政府は「まち・ひと・しごと創生法」を成立させ地方創生のために本格的に人口減少問題に取り組むことになった。全国1,718の自治体に各自の創生のための「人口ヴィジョン」と「総合戦略」の策定を求めた。国はその戦略の具体性、魅力度や期待度などにより、補助金を

日本経済の雇用の八割、経済規模の七割を占めるローカル経済が活性化しなければ地方創生など有り得ないと、二〇一四年十一月政府は「まち・ひと・しごと創生法」を成立させ地方創生のために本格的に人口減少問題に取り組むことになった。全国1,718の自治体に各自の創生のための「人口ヴィジョン」と「総合戦略」の策定を求めた。国はその戦略の具体性、魅力度や期待度などにより、補助金を

交付するといふもの。しかも毎年、戦略の見直しを義務付け、計画倒れに終わらせないようにとの配慮がなされている。

現在気仙沼市はあの大震災からの復興途上にあるが、今回の地方創生戦略策定に際してもいち早く二〇一五年六月に「けんぬま創生戦略会議」を組織して人口減少問題や産業の再生・創生に取り組んでいる。人口減少問題に対して、決定的な解決策は見出せないが、交流人口の増加、第二市民の増加を目指し、三陸海岸という恵まれた自然と豊富な「海の幸、山の幸」食材を活用した観光と食を融合させた、住んでみたくなる「スローシティ」を目指している。また、イターンやUターン組が定住できるように新産業や起業しやすい環境整備に挑戦中である。

〔地方創生を通じ、世界のモデル国としての日本を如何に築きあげるか?〕
(畠山 朔男)

「世界から見ると、日本は、三Cの(Clean, convenient, comfortable)に恵まれた国。地方創生については、財政制約を考えると公共事業やばら撒きの予算の交付をする余裕はない。それぞれの地域で知恵を発揮することが大事。その場合、元気老人を少しの経

費で使う(年金があるので)よ
うな工夫が必要。また、例え
ば、介護などの場合、行政
は、基本的に恣意的と非難さ
れることを避けるため、一律
的な対応をしがちであるが、
財政制約、各個人の負担能力
の差、などを考慮すると、状
況に応じた是非々の判断こ
そが大切。このためには、オ
ンブスマン制度などの導入に
より、こうした判断をやりや
すくすることが大事。」など
の発表があり、その後、活発
な議論が行なわれた。

(塚本弘)

■第八十五回

十月八日開
催、出席者十九
名。



関西支部報告
担当幹事 難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

東京(前号九
月十四日歴史部
会)に次ぎ、西
井易徳氏に「我
が国の近代医学
への道と長与専
齋」の講演をお
願いし、有意義
な会となった。

■第八十六回

十一月十一日開催、参加者
六名。第三編 第四十四卷 巴
利府の記三
フランス人の「権利の意

識」、特に労働権について考
えさせられることになった。
明治初頭の日本人にとつ
て、人が持つ固有の権利意識

は馴染みのない概念であつた
であろう。中江兆民はまだ出
現していないし、自由民権運
動は明治七年の政変によつて
下野した旧政府陣の主導によ
る民衆運動として漸く沸々と
して興つてきたものである。

一八四八年、二月革命が起
きた結果、復古王制が倒れ、
第二共和制が成立した。この
時期に、労働者の身分と生活
維持に関して「労働権の確
立」という思想が起つた。

それは、政府には労働者を
育成して生活を助ける義務が
あるとするものである。政府
が人民に仕事を与えられなけ
れば、政府に責任を問うこと
が出来るといふ考えであり、
こうした議論が激越になると

騒乱が引き起こされにも
なる。フランスで内紛が起き
る原因はこうした弊習による
ことが多いと、『実記』では
批判的である。しかし、帝位
に就いたナポレオン三世は、
労働権を擁立する政策を遂行
したので、民衆からも支持を
受けた。普仏戦争敗北で退位

したナポレオン三世の後を受
けた政府がプロシヤと停戦妥
協したので、これに反発した
民衆の一部がパリコミュー
ンとして反乱を起こし世界初
の社会主義的な政策の実施を
試みるが、結局鎮圧される。

フランスの人々が、この平
等のものとの権利と自由を追求

するために度々このような革
命騒ぎを起こし、その変転の
結果七番目に成立した第三共
和制のフランスに、たまたま
訪れた使節団が身を置いてい
るに過ぎない。人間としての
自由と平等(結果でなく機会
の平等)を与える多文化主義
の国として移民を受け入れて
来たフランスが、その移民に
よるテロで苦境にあるが、こ
の問題に今後どのように対応
して行くか、大いに注目する
ところである。

■第八十七回

十二月十七日開催、出席者
五名。第三編 第四十五卷 巴
利府の記四

ナポレオン一世がフォンテ
ンブローに創つた陸軍士官学
校「エコール サンシール」を
岩倉使節団一行は訪れてい
る。ナポレオン時代から現在
までこの「エコール サンシ
ール」の累計卒業生は六万五千
人(外国人留学生二千人含
む)で、明治時代を通じて日
本人六名もこの「エコール サ
ンシール」に留学し卒業して
いる。その中の一人が「坂の
上の雲」にも登場し、日露戦
争において世界最強のロシア
陸軍のコサック騎兵団を満州
の野に打ち破つた秋山好古
(のちに大将)であった。な
お、「エコール サンシール」
の今までの卒業生の内、639人
が戦死している。

使節団一行が訪れた時は、
普仏戦争の終結から間もない
ため、『実記』でも普仏戦争
の分析について述べている。
曰く、①フランスの兵士は勇
敢だったが士官レベルではプ
ロシヤ(独逸)に比べてフラ
ンスは指揮能力が劣っていた
こと、②白兵戦の重要性を知
り、その後銃剣術に励むよう
になったこと、③ナポレオン
戦争以来の騎兵を機動的攻撃
力として再認識した」などと
述べている。

『実記』に於いては、普仏戦
争を戦術的レベルの視点から
の従来の見方に留まり、日露
戦争や第一次世界大戦といつ
たその後の近代戦の前哨戦と
して普仏戦争を分析するまで
に至っていない。これは、
軍事の専門家が使節団一行に
いなかったためといふことも
あるが、あまりに直近の戦
争のため客観的に分析、評価
出来るまでの時間が経ってい
なかつた為であろう。

日本から遠く離れた地球の
裏側で起きたこの普仏戦争、
その結果としてのプロシヤ(独
逸)の勝利が、明治日本に新し
い憲法を通じて「国のかた
ち」に大きな影響を持つこと
になる。それは明治日本の飛
躍的発展の礎になったが、や
がて昭和の太平洋戦争への路
へと繋がる遠因ともなつた。
(難波 康熙)

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 4-25-1-30-102
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-537-8869

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2016年 3月~5月の予定です

☆平成28年度年次総会・講演会

日時: 4月17日(日) 13:30~16:40 (開場13時15分)

第一部: 年次総会・会務報告 13:30~14:20

第二部: 講演会 14:30~16:40

「世界の中の日本の未来」(五百旗頭真氏・国立熊本大学理事長、20周年記念シンポジウム特別顧問)

場所: 日比谷図書文化館 4階小ホール

会費: 2,000円(新橋亭新館の懇親会5,000円)

☆実記を読む会 (国際文化会館: 会費1,000円)

3月10日(木) 14:00~ 大森氏「第5、6巻」

4月14日(木) 14:00~ 西井氏「特別報告」

☆Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会

(日比谷図書文化館: 会費1,000円)

3月16日(水) 14:00~ Ch. 23

4月20日(水) 14:00~ Ch. 24

5月18日(水) 14:00~ Ch. 25

☆歴史部会 (国際文化会館: 会費1,000円)

3月7日(月) 13:30~16:30

「木戸孝允~憲法制定の歴史を振りかえる」(芳野氏)

3月22日(火) 13:30~16:30

「岩倉使節団の5人の女子留学生」(畠山氏)

☆近代史研究会 (国際文化会館: 会費1,000円)

3月4日(金) 13:30~17:00

「松下幸之助と戦後の資本主義」(森本氏)

3月10日(木) 13:30~17:00

「小林秀雄~近代の逆説」(持田氏)

3月16日(水) 13:30~17:00

「昭和篇の総括と今後の展望について」(全員討論)

☆グローバルジャパン研究会

(国際文化会館: 会費1,000円)

3月19日(土) 13:30~16:30

「科学技術とはなにか? 生命はなぜ不思議? そして文明はどこへ行くのだろうか」(和田昭允氏)

☆i-café@シエア奥沢 (シエア奥沢: 会費2,500円)

3月27日(日) 14:00~17:00

「岩倉使節団の米欧回覧~ロシア編」

(映像とお話、ミニコンサート、交流会)

会場は東急線・自由が丘駅から徒歩5分

編集後記

◇十月開催を恒例としていた秋の全体例会が、昨年は十一月十五日開催となり、恒例となっていた新年会前の発行が困難となりました。そこで、今号は昨年秋の例会と新年会の二つの全体例会を報告する合併号の形にしました。その上、十二月の二十周年記念事業に向けたプロジェクトのプレゼミナーを担当する各部会の開催頻度が格段に増加し、十二頁の増頁版にしてようやく大多数の報告を納めることができ、結構読み応えのある号になりました。

◇二〇一四年五月から継続的に開催されている、「映像と音楽でたどる岩倉使節団」が新会員の増加に大きく貢献し、今号では六名の新会員自己紹介を掲載することができました。i-café担当の岩崎幹事と植木幹事は、三年目となるサロン・コンサート形式新年会のコーディネートも務めて年末・年初から大活躍、大変な行動力・実現力に敬服します。

◇懸案だったホームページ更新が村井会員の参画により前進し、技術的課題をクリアしながら前号バックナンバーや特別寄稿欄が刷新されました。新メディア活用は今後が期待されます。(N)